歴文クラブ２８年７月研修会

「高見川流域から宮瀧遺跡」
ー吉野の歴史を訪ねてー

実施日：平成２８年７月２５日（月）

資　料

１、研修会実施要領

２、資料

①吉野の歴史あれこれ（川井秀夫）

②潜伏の地・吉野（中井　弘）

③宮滝遺跡について（坂東久平）

３、出席者名簿

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ

（担当世話人：川井秀夫・中井弘・坂東久平）

（事務局・連絡先　古川祐司）
（℡0742-44-8621、090-4298-2344）

１、実施要領

①日 時：７月２５日（月）８：２０集合（時間厳守）
②場 所：大和西大寺駅南口
（生駒交通マイクロバスが待機）
③昼 食：各自持参のこと
④その他：
・雨天でも実施します
・「やわた温泉」入浴料４００円、タオル・着替えをご持参ください。

≪行程≫

近鉄西大寺駅（８：３０）出発
↓
吉野歴史資料館、宮瀧遺跡（１０：００）・・・見学、入館料１６０円
↓
宮瀧（１０：５５）
↓
森と水の源流館（１１：２５）・・・見学と昼食、入館料３００円）
↓
丹生川上神社上社（時間の関係では割愛も）
↓
ニホンオオカミ記念碑（１２：１０）
↓
天誅組史跡（鷲家口）（１２：４０）・・・散策
↓
天照寺・石鼎庵（１３：１０）・・・散策
↓
丹生川上神社・中社（１３:４０）・・・見学
↓
やはた温泉（１４：２５）・・・入浴・休息
↓
帰途（１５：５５）
↓
西大寺駅南口着（１８：００）の予定

歴文７月研修会資料①

≪吉野の歴史あれこれ≫・・・・・・・(川井秀夫)

（一）十津川村

１、はじめに

奈良県南部に広がるこの地は、北中部の大和盆地に住む県人から見れば、雲煙の彼方にある神秘的な人馬不通の大山塊として丸で異郷の地である。

面積６７０ｋ㎡。山塊のシワを延ばすと東京２３区に匹敵する「懸河四囲に流れ、絶壁咫尺を遮隔する」と表現される。人口８５００人、１ｋ㎡に十数人の過疎地帯を形成する。

十津川は行政名では新宮川、山上ヶ岳を源に大峰山の西部を曲流南下、北山川と合流し熊野川に至る。地名の語源は「遠つ川」「十尾津川」とも言われている。

十津川人は根が単純で侠心に富む。実証的歴史学者 小野左右吉は神武など古事記・日本書紀の記述を批判したが、神武が十津川を通ったとユーモラスに信仰し、そこから十津川史が始まったとされる。

２、歴史上の足跡

十津川郷の歴史は明治まで外界に大政変があるごとに瀟洒に接触し、その証しとして戦闘員の血を提供し、それによって十津川式の自治と免租（無税）の伝統を保証してもらうべく努め、中世の法律用語「安堵」を獲得してきた歴史と言って過言ではないだろう。

（１）～**神武天皇が十津川を通った**～記紀神話には「十津川」の地名はでてこないが、八咫烏の案内で熊野の険路を北上した経緯からすれば信じるに値する。
江戸中期（本居宣長　在世時）の大和名所図会にも記述があり、現代においても十津川人のユーモラスな信仰として～、ここから十津川史が始まると言う。

（２）～**護良親王（大塔宮）の逃避行**～父　御醍醐天皇の討幕運動（元弘の変）の失敗により叡山を下り山伏姿で転々とし熊野へ、三山の社家が鎌倉体制を支持するにより、十津川から大塔村（十二村荘）へ潜入，以後の足跡は絶える。鎌倉の追捕に鎌倉へ送られ、足利直義に誅殺される。（太平記より）

（３）～**源義経の悲劇**～義経の後半生は短くて悲しい。平家討伐を成し遂げた英雄は、後白河法皇の寵愛を受け絶頂期を迎えるが、兄　頼朝の嫉妬、政治的策謀、法皇の豹変から討伐の院宣を受けた幕府の追捕の手が延びる。義経は京都を離れ吉野の里に隠れ住む。従う者愛妾　静御前を含め四人。やがて静御前は捕えられ、安宅の関を経て平泉の藤原秀衡に匿まわれる。秀衡の子、泰衡は鎌倉の勢力を恐れ、義経を自殺に追い込む。義経３１歳。

この十津川を含む吉野には歴史上の巨人は輩出していないが、中央から追われた敗者の潜入地として語り継がれるか、中央に政権与奪の合戦があると、この大山塊の地から十津川兵が出てくる。ささやかながら一種の兵力の貯蔵庫として登場する。

（二）南北朝時代と吉野

１、南北朝とは

１３３６年。執権　北条氏の追及に後醍醐天皇が京から逃れ、笠置山に倒幕の兵を挙げてから後亀山天皇が京へ戻り南北朝の合体（１３９２年）までを言う。

後醍醐天皇は倒幕の謀が露見し隠岐へ流されるが、足利尊氏・新田義貞の支援を受け鎌倉幕府が倒れ建武の親政が樹立する。（世に言う元弘の変・建武の中興）.

間もなく尊氏と義貞が対立、尊氏は敗れ九州に敗走するが、再び大軍を率いて京に入り新田義貞・楠木正成らと千早城・湊川の戦いで激突し勝利。足利幕府の成立となる。朝廷は北朝（光厳天皇）・南朝（後醍醐天皇）に分裂のまゝ６０年間治世が読く。

２、この時代の社会背景は

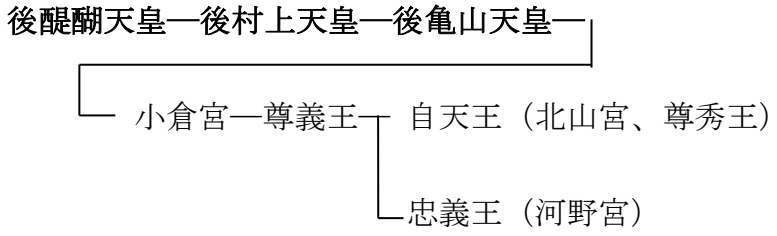
天武・持統の律令政治が揺らぎ、農民から勃興した武士団が勢力を強め、公地公民制度による荘園制を盾にした公家階層の搾取、農民の土地の所有権・相続権の安定を無視した権力構造の強権に、武力による混乱の時代を生む。

後年、室町幕府も各地に武士団の蜂起により、領地獲得の戦国時代へと移っていく。

３、後南朝の顛末

建武の中興の講和条件として、天皇は南朝と北朝より交互に即位すると言う約束が履行されず、対立が再燃。父の死後、長兄の尊秀王は自天王と称し弟の忠義王と南朝の再興を策すが、お家再興を謀る赤松家の旧臣により殺害される。川上村の郷民たちは雪中追跡、自天王の首と神器を奪う。時に自天王１８歳。弟は一旦逃れるが亡くなる。

川上村の金剛寺と福源寺では「朝拝式」として五百数十年鎮魂の儀式が読けられている。
歴史の節目には悲劇が付きまとう。



４、大塔宮　護良親王のこと

１３０８年。後醍醐天皇の皇子として生まれる。二度にわたり天台座主となる。父の倒幕運動を助け、還俗して尊氏軍と戦う。建武親政では征夷大将軍となるが尊氏と相容れず、父からも疎んじられ、鎌倉へ幽閉される。

鎌倉幕府残党狩りの際、尊氏の弟直義に殺される。１３３５年。享年２７歳。

十津川村には「熊野落ち」の途上、半年ばかり身を隠したと言う実話がある。ゆかりの寺社も多く、大塔神社・骨置神社・西教寺・東光寺など地元の義者が手篤く祀る。

５、楠木正成のこと

この人物が歴史に初めて刻まれたのは「太平記」後醍醐天皇の笠置山挙兵からである。明治３７年から昭和１６年に至る国定教科書の中で楠木正成は歴史上最大の忠臣であり、英雄であった。終戦と共に栄光の座からすべり落ちる。

この時代、土豪たちの主従関係は、米を貰う利害だけであり、モラルも美意識も思想もなく身分の隔たりがありながら、正成だけは「天皇の臣」であると確固たる思想があった。

①出身の謎

金剛山の西に広がる河内平野。１３世紀の終わりごろ今の千早赤坂村辺りで生まれる。どんな家柄で父母の名前も定かでない。

室町期の歴史資料から商業階級出身との説がある。当時、中国では南宋で大商業地帯が興り、東シナ海から日本に銭の経済が成立し始める。武士でもなく百姓（当時長男が家業を継ぐ）でもない人々（はみでた人）が例えば運搬業をする、米の値段が上がる、差益を頂く。そんな人達の支配者ではなかったかと・・・。

金剛山の麓に観心寺と言う古刹がある。伝承によると幼少の頃、多聞丸と呼ばれ学問を修めたと言う。直筆の書状が残されており書風は宋の様式が見られ、抜群の能書家であった。

②奮戦の足跡

１３３１年。河内赤坂城で挙兵。関東軍に善戦するも多勢に無勢　落城。
1 年後、難攻不落の千早城で奇策を弄し、一千の兵とともに百日間大軍を翻弄する。天下の形成は大きく変わり北条執権幕府が滅亡。中興政権京に樹立。

尊氏との対立後は一旦排撃するが、再び尊氏の大軍が攻め上り一大決戦となる。新田義貞・楠木正成ＶＳ足利尊氏・高　師直と湊川で交戦。敗退。正成　戦死。

戦前、天皇に和睦を進言するも容れられず、正成　「自殺」の戦いではなかったか。
総大将の新田義貞に兵の掌握力がなく、正成に援軍を出さなかった事も敗勢を早める。
足利方の「梅松論」には正成は智勇を兼備した男として、同情的な一文が残されている。
宋学を体得した思想の人として、希有の天皇崇拝に殉じた「もののふ」であったと思う。

（三）天誅組の変

１、発端

中央では佐幕派と攘夷派が対立。朝廷側の長州勢力が主導権を握り、孝明天皇を擁して大和行幸を画策し、一気に幕府打倒に走り出す。
天誅組の同志が決起し皇軍先鋒隊として京都を進発、堺港から河内路を経て、千早赤坂の観心寺に詣で五条に入る。文久３年（１８６３年）８月１７日の事である。

２、隊士の組織及び公家の重鎮

・真木和泉　尊皇攘夷派長州藩　過激派　大和行幸を画策
・三条実美　公家　若手過激派　政変により長州へ「七卿落ち」
・**中山忠光**　公家　〃天誅組　主将　明治天皇は甥
・松本　奎堂　刈谷藩出身　天誅組総裁　　戦死
・藤本　鉄石　岡山藩出身　　〃　　戦死
・**吉村寅太郎**　土佐藩出身　　〃　　戦死
戦闘員　１１００名（うち十津川郷士１０００人）

公武合体派・・幕府　将軍　徳川家茂・一橋慶喜　会津藩・桑名藩・福井藩
薩摩藩（当時）・新撰組・五条代官　**鈴木　源内**
戦闘員　２３００人（主として高取藩・紀州藩

３、戦いの顛末

８．１７日　五条代官所襲撃　代官　鈴木　源内　斬殺。新政府樹立の旗揚げ。
８．１８日　中央で政変。天皇大和行幸延期　皇軍の大義名分失う。
８．２２日　天辻峠に拠る。十津川郷士１０００人徴募。高取城攻撃。
↓各地で幕府追討軍と交戦するも河内勢・十津川勢の離反も重なり
↓戦局は不利な展開となる。
９．２４日　吉野・鷲家口にて壮絶な戦い。三総裁　戦死。中山卿　大坂へ脱出。
↓一週間を経て騒動は東吉野村で終焉を迎える。

徒労に終っただけの暴挙とみられがちな天誅組始末記ではあるが、この後薩摩藩と長州藩の同盟が実現し、王政復古の大号令により明治の新時代が幕を開ける。彼らの精神はこの事件から五年後に実を結び、戦没者はこの地の明治谷墓地・湯之谷墓地に手篤く葬られ永遠の眠りについている。

曇りなき月を見るにも思ふかな　あすはかはねの上に照るやと
吉村寅太郎　辞世

（付表）天誅組の足取り

天誅組の足取り
中山忠光大阪へ
長谷寺
高田
大阪府
堺港に上陸
富田林
観心寺
河内長野
千早越
神武天皇陵
鳥ヶ峰
高取城
戸毛
重阪
大淀
下市
三茶屋
三総裁戦死
鷲家
鷲家口
吉野山
岡
五條
栃原
白銀岳
奈良県
吉野川
(紀ノ川)
大日川
立川渡
武木
柏木
山上ヶ岳
大台原山
伯母ヶ峰
高野山
富貴村
天辻峠
辻堂
長殿
十津川村
和歌山県
上野地
河合
嫁越峠
内原
前鬼
川津
風屋
伴林光平一行
白川
山天
武蔵
小原
野尻
神ノ川
竜神
小又川
河内勢脱出
浦向
三重県
中山忠光一行
平谷
折立
笠捨山
木ノ本
小屋
牛廻山
上湯川
下湯川
下葛川
熊野川
凡例
河川
県境
天誅組の経路

（川井記）

歴文７月研修会資料②

≪潜伏の地・吉野≫・・・・・・・・・・・・（中井弘）

「歌書よりも　軍書に悲し　吉野山」（各務支考：かがみしこう：芭蕉の弟子）
「みよし野の　山のあなたに　やともかな　世のうき時の隠れ家にせむ」
（古今集巻 18）

吉野というのは、古くから修験道の行者たちの信仰の場としてだけでなく、歴史の節目に為政者と体制に反対する勢力との争いの場としても登場する重要な場所であった。

１．古人大兄皇子

第 34 代舒明天皇と蘇我馬子の娘、法堤郎媛（ほてのいらつめ）の間の皇子で、宝皇女（皇極天皇）を母とする中大兄皇子、大海人皇子とは異母兄弟である。皇極の時代、蘇我氏の専横ぶりは目に余るものがあった。入鹿は独断専行して、皇位継承候補者の山背大兄王を死に追いやって、古人大兄皇子を天皇に擁立しようと謀った。中大兄と鎌足は入鹿の皇位簒奪を糾弾して誅殺する。「乙巳の乱」である。担がれていた古人大兄は命からがら私邸に逃げ帰った。

皇極 4 年（645）の大化の改新の後、皇極天皇は退位するが、中大兄は自ら皇位につかず、兄の古人大兄に皇位継承を勧める。しかし母が蘇我の出である古人大兄は、危険を感じてこれを固辞し、出家して吉野にこもる。それから 3 か月後謀反の疑いをかけられ中大兄に殺害されてしまう。これで蘇我系からの天皇即位の可能性は消し去られた。

２．大海人皇子

大津宮で病に罹った天智天皇は、弟の大海人皇子に皇位を譲ろうとするが、大海人は天智の子、大友皇子に譲ることを勧め、出家して妃・鵜野讃良皇女と共に吉野宮に隠棲する。日本書紀は「虎に翼をつけて放せり」と評した。

近江大津宮から「芋ヶ峠」を越えて吉野宮瀧に入ったのは天智 10 年（671）10 月であった。その後、近江朝廷の追討の動きを察知した大海人は、8 か月後に挙兵する。大海人の軍は今の津風呂川を遡り、宇陀から伊賀、鈴鹿と兵士を集めながら進軍し、美濃の不破に入って行宮を置く。各地で近江軍と激戦の末、大津宮を攻め落とす。大友皇子は 25 歳の若さで自決して近江朝は滅んだ。古代日本最大の内戦となった「壬申の乱」である。

約 1 か月の激しい戦乱だったが、大友皇子の近江軍を破った大海人は飛鳥に凱旋し、浄御原宮で即位して天武天皇となる。天武にとって吉野・宮瀧は「蜂起の地」であった。

３、宮滝遺跡と吉野宮

①各朝天皇の行幸の地　吉野宮・吉野離宮

神武天皇の熊野から大和入りの伝説は別として、応神朝以来、雄略、斉明、天武、持統、元正、聖武の各朝にわたってたびたびの行幸があった。中でも持統天皇は在位 11 年の間に 31 回も訪問している。

「吉野宮」が文献にあらわれるのは「記」「紀」ともに応神天皇が始まりで、応神 19 年冬 10 月に吉野宮に行幸した時に、国栖人が酒を献じたとある。

雄略天皇も 2 度吉野宮に行幸した記事がみられる。中国の南朝とも交流を持ち、当時の神仙思想を理解していたとみられる雄略天皇が、風水思想の理に適ったこの地に宮を営んだ可能性は充分考えられる。（吉野歴史資料館に５世紀後半とされる須恵器の大壺の展示があり、これが雄略紀の吉野宮にかかわるものと推定する説。前園　美知雄氏）

歴代の皇族や貴族の多くが吉野をたずねていることから、吉野には恒久的な離宮が存在していたと思われる。

②宮瀧付近は屈指の景勝地

宮瀧という地名が文献に登場するのは、今から約 1100 年前の平安時代前期、昌泰元年（898）宇多上皇が宮瀧に行幸されたことが、多くの記録に残されている。

宮瀧は吉野川が高見川と合流した辺りで、当時は水量も多く、たぎりたつ瀑布、奔流、碧譚、深淵の変化を見せる屈指の景勝地であった。いまは上流の２つのダムによって流量が調整されていて、往古を偲ぶ術はないが、本居宣長の「菅笠日記」（1772）には宮瀧遺跡に架かる「宮瀧の柴橋」付近で、岩飛する男が水深８ｍの川に飛び込む描写があり、その水量を想像することができる。

③縄文以来の複合遺跡

吉野川上流の中でもひときわ風光明媚な宮瀧は、遠く古代の人たちにも好まれたらしく、すでに縄文時代後期（今から約 3 千年前）には、ここで生活していたことが知られている。弥生時代の集落の跡、古代史の中でも特に重大な出来事であった壬申の乱の舞台でもあった吉野宮、奈良時代に聖武天皇が通った吉野離宮などの遺跡が、この宮瀧の地下に複合的に眠っている。

約 3 千年前に紀ノ川から吉野川を遡って伝わってきた縄文文化は、ここ宮瀧に定着した。後に同じコースをたどって入った弥生文化は、縄文文化の生活様式を取り入れながら弥生中

期に最盛期を迎えたが、なぜか後期直前に突然姿を消してしまっている。古墳時代からはしばらく生活の跡を残すような遺跡や遺物が見られないが、飛鳥時代以降になると多くの瓦や土器が目立つようになる。いろいろな時代の遺跡が重なっている複合遺跡である。

橿考研の調査により、宮滝から聖武期とみられる石敷きの遺構や整然とした建物遺構が発掘されたことから、吉野離宮の地は宮滝であることが確実となったとされる。

④文学と吉野

縄文・弥生時代の遺跡があったこの地に吉野宮が営まれたということは、非常にかけ離れた時代ではあるが、なにか地理的に重要な要素があったと思われる。

宮瀧遺跡の前に吉野川が流れていて、前に「象（さき）の中山」という山があり、そのうしろの山懐に囲まれているこの地は、非常に風水の理に適った場所といわれる。

「万葉集」の吉野を詠った歌は、ほとんどが吉野を褒め称え、山紫水明・風光明媚な吉野の風土を、神仙の住む憧れの理想郷と歌い上げている。

万葉集だけでなく、天平勝宝 3 年（751）に編まれたわが国最初の漢詩集「懐風藻」にも、吉野を詠んだ歌が 17 首あり、吉野を神仙鏡に見立てたものが多い。このことは聖武期の離宮の性格・位置づけが表れている。

「万葉集」

万葉集には 4500 余首も収録されているが、出てくる地名は断然大和が多く、642 首に及ぶ。このうち吉野を詠んだ歌は 92 首もある。

万葉の時代の吉野は、吉野山ではなく吉野川北部流域を中心とした一帯であった。吉野といえば「桜の吉野」を思い出すが、万葉集の中に「桜の吉野」は一首もなく、大半は吉野川流域であって「山の吉野」よりも「川の吉野」といえる。

よき人の　よしとよく見て　よしと言いし　吉野良く見よ　良き人よく見
（吉野宮：天武天皇）

見れど飽かぬ　吉野の川の　常滑の　絶ゆることなくまた還り見む
（宮瀧：柿本人麻呂）

この里は　丹生の川上　程近し　祈らば晴れよ　さみだれの空
（丹生：後醍醐天皇）

ここにても　雲井の桜　咲にけり　ただかりそめの　宿と思うに
（吉野山：後醍醐天皇）

花に寝て　よしやよしのの　吉水の　枕のもとに　岩はしる音
（吉水宮：後醍醐天皇）

昔見し　象の小川を　今見れば　いよよさやけく　なりにけるかも
（桜木：大友旅人）

吉野なる　夏美の川の　川淀に　鴨ぞ鳴くなる　山かげにして

（菜摘：湯川王）

世にいでば　赤腹の魚の　片割れも　国栖の翁が　淵にすむ月

（国栖：大海人）

かくのみし　恋ひ渡らむ秋津野に　たなびく雲の　過ぐとはなしに

（蜻蛉の滝：大伴宿弥）

吉野山　峰の白雪　ふみわけて　入りにし人の　跡ぞ悲しき

（静御前）

吉野山　こぞのしおりの　道かへて　まだ見ぬかたの　花をたずねむ

（吉野山：西行）

「懐風藻」

吉野川に遊ぶ　　大伴王

万丈の崇巌削成して秀で　　（萬大崇巌削成秀）

千尋の素涛逆折して流る　　（千尋素涛逆折流）

鐘池越湍の跡を訪ねんと欲し　　（欲訪鐘池越潭跡）

留連す美稲が槎に逢いし洲に　　（留連美稲逢槎洲）

参考文献：奈良県吉野町発行　「憧憬・古代史の吉野」他

歴文７月研修会資料③

≪宮滝遺跡（みやたきいせき）について≫・・・・(坂東久平)（出典：ウィキペディア）

宮滝遺跡は、奈良県吉野郡吉野町宮滝にあり、いくつかの異なった年代の遺構の存在するいわゆる複合遺跡である。別称には、吉野宮・吉野離宮推定地などがある。

1930 年（昭和 5）から断続的に発掘が行われた。 縄文時代の後期～晩期と、弥生時代の中期に、吉野地方きっての大遺跡として注目に値する遺跡である。

この遺跡は紀伊半島のほぼ中心点にある。東への国道を行くと伊勢湾へ、西への国道を行くと紀伊水道に達する。南への国道を下ると紀伊山地を越して熊野灘に達する。宮滝から道を北方向にとると飛鳥や奈良にいたる。

1957 年（昭和 32 年）7 月 1 日に、遺跡の中心部が国の史跡に指定されている。

１．縄文時代

縄文時代の遺構は中位段丘上にあり、早期の土器がわずかながら見つかっており、後期の土器で宮滝式土器と呼ばれる土器群も出土している。その呼称は、戦前の発掘成果によって末永雅雄が提唱したもので、土器の分布の要になっているのが宮滝遺跡である。

２．弥生時代

弥生時代の遺構は、段丘上に広範囲に広がっており、確認されている遺構は 10 基の竪穴住居と 1 棟の長方形の掘立柱建物、7 基の方形周溝、土坑墓、壺棺墓などの遺構が発掘されている。この遺構から、弥生前期の土器が少数と弥生中期の土器が多数出土している。

前期や中期には、弥生時代の基本的な道具であるはずの磨製の石包丁、つまり稲の収穫具が見つかっていない。 さらに縄文時代に使われていた打製石グワ（石斧）がなお弥生時中期にも多数伴って出土している。吉野には稲作に適した場所が少なかったので、採集や漁労による生活が続いたものであろう。

３．飛鳥・奈良時代

吉野宮の所在については、吉野郡吉野町宮滝の宮滝遺跡であることはほぼ確定している。飛鳥・奈良時代の遺構は、3 期に分かれる。

Ⅰ期は、掘立柱建物が東西棟 2 軒建ち、1 軒は 2 間×6 間以上で北側に廂（ひさし）がついている。他の 1 軒は北建物の南東 60 メートルにあり、2 間×4 間の規模。

Ⅱ期の遺構が最も多く、Ⅰ期より少し西寄りに集中している。掘立柱建物が、南北棟 3 軒、東西棟 1 軒、と柵列 3 条、石溝などがある。掘立穴から奈良時代前半の須恵器・土師器の杯類、石敷溝内から奈良時代の軒丸瓦が出土している。

Ⅲ期はⅡ期の建物と重複している。礎石建物が 1 軒分確認されている。

吉野宮との関係では、Ⅰ期が天武・持統朝のもの、Ⅱ期は聖武朝前後のもの、Ⅲ期は昌泰元年（898 年）の宇多上皇の行幸に関連するという。

≪丹生川上神社≫・・・・・・坂東（出典：友史会資料）

丹生川上神社は天平宝字七年（763）の初見から応仁の乱の頃まで祈雨止雨の神として書物に記載されている。祈雨には黒馬、止雨には白馬を奉納した。

（丹とは水銀の事で、丹生は水銀の生産地であったと考えらえる。）

その後忘れ去られたが、**江戸時代**になって国学の普及で探索が行われ、丹生川畔の下市町長谷（ながたに）の**現下社が丹生川上神社**に比定された。

明治になって、この神社の江藤宮司が、『類従三代格』の神域の四至と実際の地理が合わないと主張して、四至の合う吉野川畔の**川上村迫（さこ）**の**現上社を**候補とし、**二社で祭祀を行い政府が追認**した。

大正になって今度は春日大社森口宮司が、出身地の高見川畔の**東吉野村小（おむら）**の**蟻通神社（現中社）**の平安時代の祭神像、鎌倉時代の灯籠銘と春日社文書、『大和志』、『丹生神宮造営棟上文』の記述、神域の四至の合致を根拠に、蟻通神社が丹生川上神社と主張し、**現在三社が仲良く丹生川上神社となっている。**

（1） 下社：今回は訪問しません。

社殿は天誅組に焼かれ明治 18 年に改築された。黒白の神馬が飼われている。

（2） 上社：旧社殿は大滝ダム建設で水没し、中腹に新築遷座した。

（旧社殿は飛鳥坐神社に移築。）浮御堂の下に沈む旧社地は、宮の平遺跡である。

発掘調査の結果から、８世紀中葉から９世紀初頭に集石祭祀遺構が作られている。１１世紀末から１２世紀初頭に敷石遺構が作られ、１３世紀になってようやく敷石に土を盛り社殿が造られる。

本殿と拝殿を結ぶ線上に清水、磐座、神奈備山が並ぶ古式な信仰形態をとるというが、残念ながら磐座は確認できない。古代（縄文時代早期）から祭祀が継続した、宮の平遺跡が本当の丹生川上神社であろうと考えられる。

（詳細は、森の源流館の展示をご覧ください。）

（3） 森の源流館（宮の平遺跡展示）

旧社地は橿考研が発掘した宮の平遺跡で、「森と水の源流館」には、出土した、縄文早期（約一万年前）の土器片や、中後期の、近畿では例がない立石を伴う環状配石祭祀遺構が展示されている。

（4） 中社

社殿は天保元年（1830）完成。１５世紀になって、ここを本拠として宇陀郡内での領地争いをしていた小川氏が、自身の権威付けのため上社から丹生川上神を勧請して丹生川上神社神主と名乗り、上社をまねて社殿を建立したと推察される。

『棟上文』にある「丹生神宮」は工期の短さから対岸の春日造の摂社丹生神社ではないかという。

≪メモ≫